

中務左衛門尉殿御返事

弘安元年六月二六日 五七歳

夫、人に二病あり。一には身の病。所謂地大百一・水大百一・火大百一・風大百一、已上四百四病。此の病は治水・流水・耆婆・扁鵲等の方薬をもって此を治す。二は心の病。所謂三毒乃至八万四千の病なり。仏に有らざれば二天・三仙も治しがたし。何に況んや神農・黄帝の力及ぶべしや。又心の病に重々の浅深分かれたり。六道の凡夫の三毒・八万四千の心の病をば小乗の三蔵・俱舎・成実・律宗の仏此を治す。大乘の華嚴・般若・大日経等の経々をそしりて起こる三毒・八万の病をば、小乗をもって此を治すれば、かへりては増長すれども平愈全くなし。大乘をもて此を治すべし。又諸大乘経の行者の法華経を背きて起こる三毒・八万の病をば、華嚴・般若・大日経・真言・三論等をもって此を治すればいよいよ増長す。譬へは木石等より出でたる火は水をもって消しやすし。水より起こる火は水をかくればいよいよ熾盛に炎上り高くあがる。

今の日本国去・今年の疫病は四百四病にあらざれば華陀・扁鵲が治も及ばず。小乗・権大乘の八万四千の病にもあらざれば諸宗の人々のいのりも叶はず。かへりて増長するか。設ひ今年はとゞまるとも、年々に止みがたからむか。いかにも最後に大事出来して後ぞ定まる事も候はんずらむ。法華経に云はく「若し医道を修して方に順じて病を治せば更に他の疾を増し、或は復死を致さん。而も復増劇せん」と。涅槃経に云はく「爾の時に王舎大城の阿闍世王 遍体に瘡を生ず。乃至是くの如き瘡は心より生ず。四大より起こるに非ず。若し衆生の能く治する者有りと言はゞ是の処有ること無し」云云。妙楽云はく「智人は起を知り蛇は自ら蛇を識る」云云。此の疫病は阿闍世王の瘡の如し。彼は仏に非ずんば治し難し。此は法華経に非ずんば除き難し。

将又日蓮が下痢去年十二月卅日事起こり、今年六月三日四日、日々に度をまし月々に倍増す。定業かと存ずる処に貴辺の良薬を服してより已来、日々月々に減じて今百分の一となれり。しらず、教主釈尊の入りかわりまいらせて日蓮を扶け給ふか。地涌の菩薩の妙法蓮華経の良薬をさづけ給へるかと思ひ候なり。くはしくは筑後房申すべく候。

又追って申す。きぐぜんは今月廿五日戌の時来たりて候。種々の物かずへつくしがたし、ときどのゝかたびらの申し給ふべし。又女房の御をゝぢの御事なげき入って候よし申させ給ひ候へ。恐々謹言。

六月廿六日

日 蓮 花 押

中務左衛門尉殿御返事